

## ワシントン DC での留学生活

George Washington University

望月 恒太

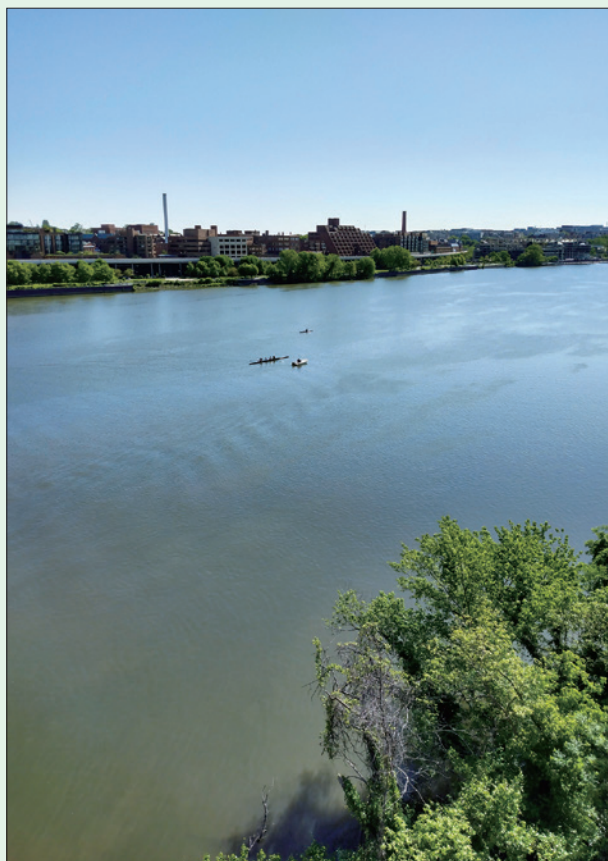
(長崎大学熱帯医学研究所)

私は、2021年6月から米国ワシントン DC にあるジョージ・ワシントン大学 Brindley 研究室でマンスン住血吸虫のゲノム編集に関する研究を行っています。ジョージ・ワシントン大学は、顧みられない熱帯病に関する研究施設があるユニークな大学です。また、ホワイトハウスから徒歩圏内にあり、200年の歴史のある名門私立大学です。キャンパスは、歴史的な街の中に溶け込んでおり、開放的で独特な雰囲気を感じることができます。

所属先の研究室には、世界中から熱帯寄生虫に関する共同研究者が留学しており、私の滞在中にもクウェート、ドイツ、タイの研究者がそれぞれ短期で滞在していました。ラボ内のスタッフだけではなく、様々なバックグラウンドの研究者と交流できたことは一生の経験となりました。彼らが帰国した後も、時々連絡を取り合って情報交換をしています。このように考え方が違う人が大勢いる環境下では、何をするにもこちらのことを積極的に話さないと伝わりません。そのため、研究でも私生活でも「話して伝える」ことの重要性を学ぶことができました。また、アメリカでの生活を通して日本の良さも感じることができました。例えば、アパートの備品の修理に際して、日本と比べると時間通りに来ない、しかも仕事のクオリティーも低いなど、これまであまり日本で意識していなかった有り難みを知ることができました。民間でも行政でも担当者の気分次第で必要な提出書類等が変わってしまうことも、結構なカルチャーショックでした。

研究に関しては、ボスと一緒に NIH のグラントに取り組んだり、これまであまり報告されていない実験を試させてもらえたりと何か新しいことにチャレンジするという点で良い環境が揃っていたように思います。自分から何かを起こそうとすると手を差し伸べてくれる人がいることは、とても心強く感じました。新型コロナウイルス感染症の流行がまだ続いていた状況で、受け入れの手続きを進めてくれた大学の国際事務部門にも感謝しています。また、他施設になりますが、ワシントン DC 中心部からメトロとバスで1~2時間の距離の場所に、住血吸虫の生体試料を提供している Biomedical Research Institute があります。この施設では、数日間の寄生虫に関するトレーニングコースに参加してきました。熱帯地域で見ることができない淡水貝の取り扱いなど、多くの研究施設では経験ができないことを学べて有意義でした。研究プロジェクトを行っていく上で、こういった他施設とのつながりも良い勉強になりました。ちなみに、この施設でもアメリカ人以外に中国やリベリア出身の方がいて、プライベートな話も面白かったです。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださいました上原記念生命科学財団の皆様、長崎大学医学部と熱帯医学研究所の諸先生方、スタッフの皆様には心から感謝申し上げます。



近所のポトマック川